



澤田ふじ子

一日たれなる



討たれざるもの

中公文庫

©1985

昭和六十年九月二十五日印刷
昭和六十年十月十日発行

著者 澤田ふじ子

発行者 嶋中 鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

ISBN4-12-201262-7

定価 三八〇円

中公文庫

討たれざるもの

澤田ふじ子著

中央公論社

目次

霧の中の刺客

7

闇の音

51

討たれざるもの

99

冬の鼓

135

扇の月

179

鬼火

208

解説

245

清原康正

討たれざるもの

霧の中の刺客

一

暖簾のれんをくぐって表に出ると、闇のとぼりが下りかけている。低い薨いづかの波の向うに愛宕山が薄墨ではいたように見え、山頂の社にともった火がちらちら光っていた。

菊蔵はたちどまって袷纏はくけんに腕をとおし、首を左右に撓ななめ、凝った肩をもみほぐした。

きのうから二日一晚、高機たかはたに座りつづけていただけに、おだやかな菊蔵の目も、さすがに血走っていた。

「いそぎの仕事とはいえ、徹夜させたらうえ、夕方までに紋綾を一反織りあげてしまえとは、旦那もあこぎな人の使いようや。こんなが続いたら、いくら若いゆうても、わしらから身体いかしてしまいうわい。どうや佐之助はん、あんさんもそろそろ仕事終るやろな。それすんだら、門前町の榎屋でいっぱいやっていかへんか。わしは一足先に行ってるよって——」

織機はたをならべて仕事をする佐之助に、菊蔵は織屋おりやの橘屋たちばなや仁兵衛をこきおろし、表に出てきたのである。

「菊兄い、そらええなあ。誘ってくれはったお礼に、今夜はわしがおごらせてもらうわ」織り上げまで、あと一寸ほど無地場むじばを残した佐之助は、にやつと笑ってうなずいた。

二人とも歳は同じだが、佐之助は菊蔵を兄貴呼ばわりしている。

佐之助は高機に座ってから四年目だといひ、橘屋の織手になったのは半年前。それまでは堀川の織屋にいたと話したが、くわしいことになる、どうしたことか口を濁した。

橘屋にいわせれば、腕はいいが、どこの織屋でも腰の落ちつかない渡り職人との評だ。義理のある人に頼まれ、仕方なく雇ったのだとぐちっていた。

そんな佐之助だが、菊蔵には妙になついていた。なにかと飲み屋に誘いたがる。

いつも断っていたが、今夜だけは反対に、菊蔵のほうから口を掛けた。

長屋にとんで帰りたい気がかりなこともあった。しかし、久しぶりに北野門前町で酒を飲み、気持のなかに重くのしかかっているものを忘れたかったのだ。飲むならやはり連れがほしかった。

菊蔵が住む裏店うらだなは、北野門前町に近い愛染寺の向いにあつた。五年前、両親をつづけて死なせ、いまは独り暮しだ。

家に帰っても、きのうの朝炊いた麦飯と、大根葉のういた冷たい味噌汁が待つだけである。

それに、早く帰ったからといって、おしののことがどうなるものでもない。また思い、胸にきざした彼女の白い顔をあわててむこうへ押しやった。

だが、きのうから今日にかけ、びんと糸を張った高機に向う菊蔵の脳裡には、おしののくぐもった顔がちらついてならなかったのだ。

高機は空引き機そらひきばたともいい、二人がかりで織機を操作する。千巻ちまきの前に座って箴おきと杼ひをうごかす菊蔵の頭上に花楼板へだないたがあり、紋揚げされた通糸つうじをひっぱる空引き職人が座っている。空引きは、織職人の手にあわせ、紋を織るために経糸たていとをひき上げる。

それだけに、織手との呼吸が合わなければならなかった。調子のいいときには、上と下で軽快なもじり文句が交されている。

ところが、きのうからの菊蔵は、手間稼ぎの空引き職人が首をかしげるほど寡黙だったのである。

それでも菊蔵は、さすがに十年も年季をつんだ紋織職人だった。先に仕事にかかった佐之助より、小半刻（一時間弱）早く紋綾を織りあげていた。

おしのに対する気がかりが、彼の手を早めさせたのかもしれない。

おしのは二年前、下京から菊蔵が住む裏店にひっ越してきた辰五郎という大工の娘で、今年十八になる。五つ歳の違う兄の富七と父との三人暮しであった。

富七は中京の指物屋に通う生真面目な職人。菊蔵が使いなれた杼の修繕を頼んだことから

親しくなり、一月もすると、妹のおしのが、独り住居の菊蔵に煮炊きものを届けるほどつき合ひが深まった。

それにつれ、おしのはなにかと菊蔵の世話をやくようになり、大文字の送り火と一緒に見に行つた夜、紙屋川の草むらで、二人はごく自然に身体を重ねる結果になった。

「おりをみて、お父はんや富七はんにわし等のことを打ち明ける。おしのちゃんをわしのおかみはんに欲しいと頼んでみるんや。心配せんかてええで——」

「うれしい」

「わしとおしのちゃんはもう他人やないのや。しっかり世帯やっていこうなあ」

自分の背中に顔を寄せ、まだ胸をあえがせているおしのに、菊蔵は優しくいった。

彼と富七との間には、これまで酔った勢いで、おしのを嫁^やるの貰うのという話がすでにあつたのだ。二人がこうなつたことを、富七は兄として、きつと喜んでくれるだろう。

ところが、それから半月後、富七があやまって左手首の筋^{すじ}を鑿^{のみ}で切ってしまったのである。

指物職人が手の筋を切つては、もう役たたずになつたのと同じだ。傷がいてから、指物屋の親方は、富七を追い廻しに使いはじめたという。

まじめな職人として一人前の仕事をしていただけに、富七の荒れようは、父親の辰五郎やおしのを震えあがらせた。

まず毎晩、外で酒を飲むことからはじまり、数カ月後には内野遊廓の賭場に入りますよ

うになった。

つぎには、賭場で夜通し賽さいの目を追い、明けがたふらっと帰ってくる。一日中、布団をかぶって寝ていたかと思えば、不意にいなくなる。家から金目の品物を持ちだし、また賭場に掛けていくのだ。

不規則な生活と心のすきみが顔や風体ですぐ現われ、数カ月もたつと、富七は誰の目にももういっぱしの無頼者なうずものに映った。もちろん、親方からはとくに暇を出されている。

最初のうちこそ、辰五郎は口やかましく意見したが、付け馬を連れてもどってきた富七に、銭を出ししぶったため足蹴にされてから、息子の遊蕩を黙って見すごすようになった。もともと内気な人物だったのである。

息子を見る辰五郎の顔には、いつも怯えおびがあり、急に老いをきざんだ姿が小さくちぢこまり、傍目にも痛ましかった。

世間への気がねもあったのだろう。

おしんや辰五郎から頼まれていた菊蔵が、思いきって説教めいたことを口にしたのは、富七が死ぬ一月前だった。朝、仕事に行こうと家を出た菊蔵は、愛染寺の築地沿いで、ぼったり富七と出会ったのである。富七の人体にんていは、父親の辰五郎ならずとも怖気をふるうほどであった。

遊廓の女郎からでも借りてきたのか、襟えり垢あかの光った女物の絆纏をはおり、前歯のすりへっ

た下駄をつっかけている。薄汚れた足には、足袋さえはいていなかった。

北野神社の梅がほころびかけたとはいえ、まだ寒かんのもどきがある。その日の朝もうっすら霜がおりていた。

「また朝帰りかいな。いいご身分やなあ――」

顔をこわばらせた富七に、菊蔵は怒りをふくんだ声をかけた。

「おまえこそ、早うから精だすやんか」

富七は首をすくめて足踏みした。

さすが富七はばつ悪げだった。

「堅気に稼いでいるおれのことと言わんといてもらお。それよか富七つあん、おまえいつまで親父はんやおしのちゃんを泣かす気なんや。おまえの極道ごくどうも、いまに止むやろと思つてたが、もうおれは黙つてられへん。そんなこといつまでも続けられるもんやないで。いい加減に目さまさなあかんやないか。手の筋を切ったぐらいでなんちゆうこっちゃ。指物だけが職人仕事やないわい。やる気さえあれば、ほかになんぼでもおまえに出来る仕事があるがな。ここいらで、そろそろ正気にかえったらどうやな」

自分を見下すように立つ富七に言った。

「朝っぱらからえらそうにお説教かいな。へん、人のことはなんとも言えるわい。おれのことば放つといてくれや」

「なんや、ほつといてくれやと」

まともな返事を予想していた菊蔵は意気ごんだ。

「ああ、放つといてくれたらええんや。おまえのいまの口舌くぜつが、おしのの断りやっても、おれはちつともかまへんのやで。ぐれた兄貴がいてたら、迷惑かけるよってなあ。ほな去いなしてもらうわ」

富七は道端にかつと唾を吐くと、肩をすくめ、下駄の音をひきずって裏店の破れ塀に消えていった。

富七が内野遊廓きまようや桔梗屋の遊女と心中したのは、それからほぼ一カ月後であった。相手の遊女は胸を病んでいたといい、二人は桔梗屋の物置部屋の梁でくびれていたのである。

世間の目をはばかった葬式の席で、菊蔵はおしのから、富七が指物屋の末娘の婿に望まれていたことを聞かされた。

左手がきかなくなった富七に、親方は冷たい顔で、この話はなかったことにしたいと断ったという。

富七のすさみようには、それなりの訳があったのだ。辰五郎は原因がわかっていただけに、息子の遊蕩を見すごしていたのだった。

「これでええのや。富のやつもやつと楽になりよったやろ」

桔梗屋との掛け合いをすませてきた辰五郎は、脂やじのたまった目をうるませながら、小さな

位牌に線香を焚き、ぼつんと呟いた。

身体がまたひとまわり小さくなって見えた。

ところが、富七の初七日がすまないうちに、とんでもない出来事がもちあがってきた。

内野遊廓をとりしきる仁左衛門の賭場から、富七の書き判のある証文を持った人体の悪い男が、利子をつけ、二十両の金を返せと押しかけてきたのである。

証文は全部で十二枚あった。

富七の書き判には不審があったが、夜毎の賭場通いを考えれば、偽証文だと決めつけられない。

だが辰五郎は、桔梗屋からの掛け合いで無一文になり、金目の物は一切失っている。それどころか、親方に頼みこみ、不足分を借りたくらいだった。

大枚二十両はとも払えない金高であった。

「父つつあんが払えなんだら、気のどくやけど、姉ちゃんの体で払ってもらうより仕方ないなあ。なに、親分の妓楼やかたで働いてもろたらええのんや。こちらはんにかて都合があるやろし、いまずぐ女郎になれとは言わへん。親分かれて鬼でも蛇でもないさかいな。せやけど、一月も二月もよう待たせてもらわんで。ほならまた寄せさせてもらうわ」

男は上がりかまち框に立ったまま言い、去り際、夜逃げや心中せんというや、念のために見張らせてもらうわなあ、と捨科白すてざりふを投げていった。

菊蔵が裏店にとんで帰りたいた気がかりは、辰五郎父娘のことであつた。しかし、帯をもつ相手を助けることでも、その日暮しの織職人の彼に、二十両の金をつくる目処はなかつた。

織屋の橋屋に相談をかけたが、とんでもない、あきまへん、そんなことに手出したら、身い滅ぼしてしまふやでと断られ、くどくどと強意見されたくらいである。

今夜は酒にでも酔わないことには、裏店に帰れない氣持だ。菊蔵は心にやましさを感じながら、おしのの身に起つた難儀が、過ぎ去っていくのを、目をつむつて待つより仕方がないとまた思つた。

六つ（午後六時）をまわつた時刻だが、狭い西陣の町辻には、荷を積んだ白糸問屋の大八車が忙しげに往来している。あちこちから織機はたの音が、まだかまびすしく響いていた。

しかし、軒提灯に火を入れはじめた町辻には、一日の仕事を終えた織屋の手間取りたちの姿が、ぼつぼつ見かけられた。

京都の西陣は、いま好景氣にわいている。

今年、徳川幕府にお代替りがあり、年内には朝廷から將軍宣下がくだされる。

勅使をむかえる江戸城では、供応役の人選がはやくも行われているという。

將軍宣下とともに、京都朝廷と徳川幕府のあいだには、このあとさまざまな儀式がつづき、それらに用いられる有職織物ゆうしきの注文が、諸大名の京都呉服所から、西陣の織屋にわつと集ま